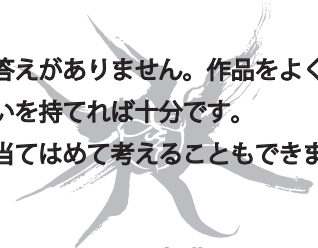
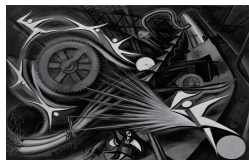


# ある かん 歩いて と 感じて と かき留めよう！

☆問いには決まった答えがありません。作品をよく見て自分なりの答えや思いを持てれば十分です。問いを、他の作品に当てはめて考えることもできます。



- ① 太郎は自分の作品には、タイトルは不要だといっています。タイトルを付けると観る人はそれを意識してしまうが、作品は観る人によって様々な意味をもつもので、観る人がタイトルを付けてもよい、と考えていました。みなさんは、どんなタイトルを付けますか？



重工業  
1949年(38歳)  
油彩 206.3×266.7

この頃より自らの芸術理念の核としての『対極主義』を提唱します。一見、無意味、無関係な組み合わせは、見る人に、「これは、何だ」と心の中に衝撃を与えます。作者の思惑を超えた意味や解釈が無限にうまれます。絵の中で、対極になるモチーフ探してみましよう。



空間  
1934年(23歳) / 54年  
油彩 114.0×91.0

この作品を制作した1934年ごろ太郎は、フランスのパリで、カンディンスキー(1866～1944)やモンドリアン(1872～1944)らの抽象絵画を切り開いてきた画家たちとともに、アブストラクション・クレアシオンという抽象芸術運動のグループの一員として活躍しはじめました。

- ② 作品の中の人物になりきると、絵の世界をより深く感じることができます。気持ちだけでなく実際にポーズもとってみましよう。真ん中の人以外のキャラクターにもなりきってみましよう。



明日の神話  
1968年(57歳)  
油彩 177.0×1087.5

メキシコのホテル・デ・メヒコから依頼された壁画の原画として制作された作品です。実際の壁画は幅約30メートル高さ5メートルあります。画面には、1954年にピキニ環礁の水爆実験で被爆したマグロ漁船・第5福竜丸やマグロが描かれるなど、社会的な問題が題材に選ばれています。太郎はこの作品について、「原爆が爆発し、世界は混乱するが、人間はその災い、運命を乗り越え未来を切り開いていく、と言った気持ちを表現した」と述べています。このホテルは倒産し、太郎の壁画も行方不明になっていましたが、2003年、メキシコ郊外で発見されました。現在、渋谷駅に設置され、多くの人たちが往来する通路で人々にメッセージを投げかけています。

- ③ 岡本太郎代表作品の《太陽の塔》は、今も大阪の万博会場跡地に残されています。高さ70メートルもあります。それを想像しながら、太郎の言葉の意味を話し合ってみましよう。



太陽の塔  
1970年(59歳)  
FRP 145.0×128.0×45.0

### ☆太郎のことば

この会場に来て、すべての人が無条件になり、あのベラボーな祭りの雰囲気と同化されてほしい。人間はすべてそのままの姿で宇宙にみち、無邪気に輝いているものなのだ。「太陽の塔」が両手を広げて、無邪気に突っ立っている姿は、その象徴のつもりである。素っ裸の心で、太陽と、宇宙と合体する。日頃のこせこせとした自分を脱け出して・・・「祭り」のよここび、生きるよここびがそこに生まれる。\*川崎市岡本太郎美術館所蔵作品集 TARO 2005年 二玄社

- ④ 「いったい美術において単に眺めるという立場があり得るであろうか。真の観賞とは同時に創るということではなければならない。観ることと創ることは同時にある。」  
岡本太郎『青春ピカソ』より

オリジナルの“○○○の椅子”を描いてみよう！特徴も考えてみよう！